



●足袋の色

皆さんは、足袋の色を問われれば何色と答えるでしょうか？大多数の方は、白足袋を思い浮かべることでしょう。なぜなら、結婚式や卒業式など正装の着物を着用する場合は、白足袋が一般的だからです。

その他に、昨年度の大河ドラマ『べらぼう～蔦重栄華乃夢噺～』を見ていた方はお気づきになっていたかもしれませんが、黒足袋の町人姿も見かけたのではありませんか？

江戸の町は、当時、当然ですが路面状況が悪く、道の砂ぼこりなども多かったため、汚れを嫌う町人の足袋は黒を履いていた人もいました。つまり、カジュアルなシーンでの着用です。

しかし、能舞台では、昔も現代も白足袋の着用が必須で、高い地位の武家の嗜みだったことが伺われます。身分や芸事の種類によっても足袋の着用色が変わります。

それでは、歌舞伎や狂言はどうでしょうか？これらは町人の娯楽だったため、色足袋もオーケーであり、現在でもその伝統は踏襲されています。歌舞伎の有名演目の主役である助六の足袋の色は黄色。狂言も足元をよく見てみると演目にもよりますが、黄色の足袋の時があります。

(幹事：昆野照美)

●日本の伝統的な色名 紅梅色

奈良と平安時代の和歌や物語に登場する花は、圧倒的に梅が多く、次いで桜と桃が続いている。「木の花は、濃きも薄きも紅梅」をはじめ、枕草子には梅が15回も登場する。

源氏物語には「紅梅襲の唐織の細長」、「唐綾の小紋の紅梅」、「紅梅色の紙」などの表現が見られる。

平安時代に発生し、完成された配色の文化に「かさねの色目」が挙げられる。染めや織の技術を取り込んだ平安ファッションの配色システムで、表地と裏地の配色を指す「重ねの色目」、十二単の単衣の重ね方の「襲の色目」、織りの経糸と緯糸の組合せを指す「織りの色目」などがあり、その一部を紹介する。

単衣を二枚重ねる、梅に関わる重ねの色目の配色を示すと、「梅」という配色名は表白・裏蘇芳。「梅重ね」は表濃紅・裏紅梅。「裏梅」は表紅梅・裏紅。「紅梅」は表紅梅・裏蘇芳。「紅梅匂」は表紅梅・裏淡紅梅。「蒼紅梅」は表紅梅・裏濃蘇芳。「今様色」は表紅梅・裏濃紅梅と細かく配色が指定されていて、平安の女性の感性が感じとられる。

紅梅色が、如何に平安女性に愛され、尊ばれ、多用された色名であったかが見て取れる。

(永田泰弘)

●大辞泉ひろいよみ 109ーし

色道：しきどう。色恋に関する方面のこと。いろのみち。

色読：しきどく。書を読んで、文字に表された意味だけを解すること。体読。日蓮宗で、法華経を正しく読み取って実践すること。

色法：しきほう。仏語。物質的存在の総称。一切の存在するもののうち、空間的占有性のあるもの。心法。

色魔：しきま。色欲を満足させるために、次から次へと女性をだまし、もてあそぶ男。女たらし。

色盲：しきもう。色覚が全部または一部欠如している状態。赤と緑の色覚が欠けている赤緑色盲が多い。伴性劣性遺伝し、男性に現れやすい。

色目人：しきもくじん。中国元代、その治下にあったトルコ・イランなど西域地方諸民族の総称。モンゴル人に次ぐ準支配民族として重用され、政治・経済・文化の諸分野で活躍した。

色釉：しきゆう。→いろぐすり。

紫極：しきよく。(天帝の居る所の意の「紫微垣」から)天子の居所。禁中。紫禁。

色欲・色慾：しきよく。男女間の性的な欲望。

*大辞泉：小学館発行国語辞典 (永田泰弘)